

本日の学び:「ヤコブの脱走」 テキスト:創世記31章1-13節(参照31章14-54節)

【理解の手がかりとして】

ハランに着いたヤコブは、ラバンに迎えられた。ラバンには二人の娘がおり、姉はレア、妹はラケル。ヤコブはラケルを愛し結婚するため7年間働くが、ラバンに騙されレアと結婚させられる。そして更に7年間働いてラケルを妻とした。

結局ヤコブは、レアとラケル、そして彼女たち以外の女性(召使いたち)とも結婚し、子をもつける。そのような展開の中で、レアとラケルの間に争いが起きることとなる(30:1-8)。

やがてヤコブには12人の子どもが生まれ、それがイスラエルの12の部族の先祖になる(35:22-26)。ヤコブは次第に実力を持ち、富める者となるが、このことはラバン一族との間にトラブルを生み出す。その中でヤコブは神のことは聞き、カナンへと帰ることになる。それが今課の主題である「ヤコブの脱走」劇である。

ヤコブが逃げることを決心したのは、ラバンの息子たちが言っていることを耳にしたことがきっかけであり(31:1)、また義父ラバンの態度が以前のようにではなかったから(31:2)であった。そこで主のことはヤコブに与えられた。「あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる。」(31:3)

そこですぐにヤコブは行動を起こし、ラバンが羊飼として一番忙しい仕事、羊の毛を刈っている留守の間に、大家族を引き連れて、自分が手に入れたすべての家畜と財産とともに逃げ出す(31:17-19)。

4-16節は、ヤコブがラケルとレアの妻たちに、彼女たちの父ラバンから一緒に逃げるようにと一生懸命説得する場面である。野原に呼び出したのは、この逃亡を秘密裏に行う算段であったからだろう。

ヤコブは「神はあなたたちのお父さんの家畜を取り上げて、わたしにお与えになったのだ」(31:9)と妻のラケルとレアに説明している。ここに、ラバンのもとで財をなした長年の成果を神の栄光に帰しているヤコブの信仰を見ることができると言える。

それに対してラケルとレアはこう言う。「神様が父から取り上げられた財産は、確かに全部わたしたちと子供たちのものです。ですから、どうか今すぐ、神様があなたに告げられたとおりになさってください」(31:16)と。こうしてラケルとレアは、ヤコブが今すぐ行動を起こすことに賛成し、自分たちもヤコブについてゆくと言った。

19節で「ラケルは父の家の守り神の像を盗んだ」(31:19)とある。この神の像は家族もしくは個人の守護神の像と思われる(詳しくは不明)。しかしこれは異教的なものであり、のちにヤコブはシケムで、他の者が持っていた神々の像とともに捨てさせた(35:2-4)。

ヤコブが逃げた後三日目に、ラバンはそのことを知り、一族の者を引き連れて追いかけて、ヤコブの一行に追いつく。神はその夜、夢の中でラバンに現れて、「ヤコブを一切非難せぬよう、よく心に留めておきなさい」(31:24)と告げる。このお告げが、ラバンの不満を押しとどめさせ、寛容な決断「父の家が恋しくて去るのなら、去ってもよい」(31:30)を引き出す。

最後にヤコブはラバンに「もし、わたしの父の神、アブラハムの神、イサクの畏れ敬う方がわたしの味方でなかったなら、あなたはきっと何も持たせずにわたしを追い出したことでしょう。神は、わたしの労苦と悩みを目に留められ、昨夜、あなたを諭されたのです」(31:42)と言った。神が共にいてくださる(インマヌエル)信仰がヤコブの言葉の節々から感じられる。

ヤコブの長い非難の言葉に対して、ラバンは反論しなかった。そしてラバンは、二人の間で契約を結ぶことを提案する。その契約とは、お互いの安全を守るためのもの、互いに相手を侵略しないこと、互いの領土の境界

を定めて、そこを越えないことであった(31:52)。そしてラバンはヤコブと契約を結び、それに伴う食事をした日の翌朝早く、ハランの自分の住まいに帰って行った(32:1)。

ちなみに、これ以降、ラバンは創世記に一切登場してこない。ヤコブのラバンからの完全なる独立、イスラエルの歴史において関わったラバンの役割がここで終わっているかのようである。しかし、その20年間(31:41)は、兄エサウの憤りが収まるまでの期間と考えると、ヤコブにとって必要な20年であったとも言える。こうして物語はエサウとの再会に向けて展開を始めることとなる。

さて、参照箇所も含めて、逃亡劇の結末まで見てきた。そこで本日のメイン箇所に焦点を絞って考えよう。「人生のこの時点で、彼をして新しい人生へと旅立たせたものは何だったのでしょうか」と佐藤彰氏は問いつつ、そこに三つの理由を数えている。

- ① 周囲の状況、ヤコブに対する態度の変化
- ② ヤコブ自身の気持ち
- ③ 主からの示し

佐藤氏は言う。「みこころの道を判断する際、この三方からの確認は重要」と。すなわち「自分の心は何を欲しているのかも率直に直視すべきです。そして周りの状況の変化も、時が開かれているか否かを客観的に判断する貴重な材料となります。けれども、もしもこの内と外からの二方だけで進む道を定めるとしたら、大切な一点を見落とした判断と言わざるをえません。肝心なのはもう一方、天からの示し、神さまの心、上からのゴーサインの確信です。」

なるほど、私たちそれぞれの人生の分岐点において、大切にすべき三つのことを確認させられる。「周囲の状況の変化」と「自身の気持ち」も大きな要因。そしてその中で主の言葉と照らして、「みこころ」を聴き取っていくことができるのであろう。最後に、今一度佐藤氏の言葉から、「行く手に道が幾重にも見えたとしても、この三方のみこころの判断を怠ることなく、一つ一つ確認しながら、一つの主のみこころの道を、誤ることなく選択していきたいものです。」

『聖書教育』より

「神のお告げは、争い事があっても非難し合うのではなく、互いを認め合う対話へ、そして関係回復へと導いたのです。」(聖書の学び～断絶からの回復)